

第五期通信

VOLUME 1.
(1979.11)
edited by Dai5retsu



"Dai5retsu Week"
at Hokuten-
garo, Morioka
between 9 & 15
August 1979.

←
Free Session on
13 August: Kuni
haru Nagai(ds)/
Yoshiaki "Onny-
k" Kinno(ts)/Sa
toshi "Maruso"
Sonoda(el-g)/Hi
roto Koyama(sy-
n)/Seiichi Naka
tsuvo(strings).

←
Message from
Henry Kaiser

Keep play free improvisation and
organize together with other
Japanese Improvisors. Japan
has a lot of people so it
should also have a lot
of people who play free
improvised music. I think.

フイバー?

→
Henry Kaiser - Toshi-
nori Kondo Duo at
"Jazz & Now", Sendai
on 6 October 1979.



第五期

勸無断転載!

に、同封の錠剤=実はエフェドリン=を、何の薬だとは教えずに飲んでもらわなければならなかつたので)
等が掲げられる。

総括：(1)1週間という比較的長い開催期間と観客参加を前提とするイベントの存在にも拘らず、“身内”以外の観客が非常に少なかつた(のべ30人程度)。この原因は、一言で言えば“情宣の不備”に尽きると思われる(ポスターがわかりにくいものなかつたことや、チラシを作らばらまくことを怠らなかつたこと等)が、それに加えて会場の場所の悪さ(肉屋の3階にあり、余り自立たない)・観客層の不在(藍岡ではまだこの種のイベントに対する関心は薄いように思われる)等のマイナスの要因が掲げられる。

(2)主催者側の事務的な仕事区分=分業が曖昧なかつた。たが、あらゆる面で金野一人が忙しく動き回る結果になつてしまつた。一作品を提出しただけで参加したことになるのなかつたら、只の展覧会と何も変わりがない、具体的な参加とは、情宣・会場準備・人身手配・会計といふ、たが諸々の作業に積極的に関わることである一と、予め確認しておいたなかつたにも拘らずである。

(3)※要経費の見積りが甘なかつた。たが、赤字になつた。赤字になつた際の対処の方法を予め決定しておかなかつた。たのも、間違つてあつた。…要するに、《第五列週間》は、余り良い成果を生まなかつた。たが、

対策：①開催される場所(今回は藍岡なかつた。たが)の“地域性”を考慮に入れつつ②し、かり予算を立てて採算とれるように(赤字覚悟というのなら、対応策を予め立てておいて)③事務的な口を省くための役割分担の下で④必要十分な情宣を行い⑤ルーズな参加者が皆無(に近い)状態で⑥全員定期的に連絡を取り合ひながらイベント実施に当たれば、

失敗は最小限度に抑えられる筈である。これはどんなイベントに関しても言えることなかつたと思うが、我々のやろうとしている“インセクション・アンデパンダン”イベントの場合は、なかつた。たが、たが別の機会に別の形で、満足のいくようなイベントをやつてお目にかかけよう(我々は懲りることを知らないのである)。
「まあ見てるないいさ」

* 《第五列週間》中の“演奏”を記録したテープは60分・90分とリマゼ9本に及びますが、これらのテープを編集して90分テープ1本にまとめた《第五列週間・ライブ》が、第五列テープ・5C-07としてリリースされました。希望者にお分けいたします。
(申し込み先は次号欄外を参照)

* 《第五列》は International Slapstick Organization だと言ふ識者もいます。

* 《第五列》は営利団体ではありませんので、テープはせよ印刷物にせよ儲けを度外視して原価(時口は原価以下)で販売しています。
(これは現体制下では“悪いこと”です。儲けは悪いことです)

ハンリー・カイザー & 近藤等則 DUO 於「JAZZ&NOW」(仙台)

(1979.10.6)

コンサートは, Duo → Duo → 近藤 Solo → Kaiser Solo → 休憩 → Duo → アンコール (Duo) という具合に進行した。

Kaiser はセミ・アコースティック・ギターをデジタル・メモリー・エコー・マシーンを通して演奏。演奏スタイルは Derek Bailey 風であらう。Fred Frith 風であらう。たりあるいはアタリマエのロック・ギタリスト風 (ブルー・ノートが吹てくる → ブルース・ロック期) であらう。たりと、良く言えば多彩、更に良く言えばハチャメチャ。ゴタメチャである。抱えて弾いていたセミ・アコの他に、ハード・ケースの上に載せたエレキ・ギターを (横にしたまま) くり、プンプリペアーしたり、エレクトリック・ボウ (ホチキスに似た形状の電気を) や金属棒で叩いたりこす、たりして、トリョキーンな音を出していた。

近藤は、意識的に「あたりまえのトーン」をせさないようにしているようだ。た。トランペットとフリューゲルホーンをほぼ同じ頻度で用いたが、いずれも途切れとぎれの音やかすれた音を多用していた。その他自立、たのは、まるで Han Bennink のようにそこらじゃうのものでパーカッションな音を出していたことである。

例えば3番目の Duo の様子をご紹介すると:

近藤は紙袋の中から孫の手やウルトラセブンの人形などを取り出す。Kaiser はその人形をギターの弦にはさんたり、人形の首に弦を巻きつけて振り回したりする (ちなみは、Kaiser はウルトラ・シリーズのファンたそうである)。近藤は1.5m 程のビニールパイプの一端にじょうごをつけ、もう一端をトランペットの朝顔に突、込んで振り回すわ、そのじょうごを近くの客に押しつけたり、かぶせたりするわー いやはや大変な騒ぎである。

アンコール (と言、ても、それは客の要求を待たず、Kaiser がラジオのスイッチを入れたのをき、かけに不意に始ま、たのだが) に至、ては、ラジオから偶然流れてきたサカキバラ、イフエの「哀愁のロンド」と「共演」しているのである。(客席ど、と沸く)

このように、彼らの演奏は非常に自由奔放なものである。た。陳腐な比喻を用いるなら「オモチャ箱をひ、くりかえしたような大騒ぎ」とい、たところか。いやゆる「フリー・ジャズ」や、INCUS 系のレコードで聴かれるような「張りつめた、真剣な即興演奏」を期待した客はあるいは肩すかしを食、たかもしれないー もちろん、彼らの演奏が「不真面目」であ、たと言う訳ではない、たは「緊張感」以上に、「ゴモア」「あわただしさ」とい、た要素が自立、していた、ということである。こうした要素は別に「真剣さ」と矛盾するものではないのである (本当たうか)。

第五列は彼らの演奏を支持する。そのミュージシャン離れした裏暗らしい「演奏性」に共感を感じるからである (これはもちろん、誉めているのだ)。騒音と音楽との境界で楽しいにランズ (おはや「危いにランズ」などとは言われないのだ) を保つことーそれは新しい即興演奏の条件のひとつなのである (本当たうか)。

第五列チーフオリジナル録音・海賊テープ多数有り 50円切手同封して頂けば、リスト進呈を申し込み先 (第五列へのあらゆる問い合わせも受け付けます) 〒020 盛岡市中野1-10-31全野吉光 (phone 0196-52-4673) 又は〒166 杉並区高円寺南4-41-7水川荘2号室

第五列チーフオリジナル録音・海賊テープ多数有り 50円切手同封して頂けば、リスト進呈を申し込み先 (第五列へのあらゆる問い合わせも受け付けます) 〒020 盛岡市中野1-10-31全野吉光 (phone 0196-52-4673) 又は〒166 杉並区高円寺南4-41-7水川荘2号室

付: コンサート後のディスク、ジョンにおける質疑応答より。

Kaiser 「ジャズ・ギターよりブルース・ギターの方がおもしろいよ。多くのジャズ・ギタリストはコードを押えたりするだけで、ピアノの役目と大して変りない。ウェス・モンゴメリーやジョー・パスはつまらない。ブルース・ギタリストは自由にリズム・トーンをコントロールして変化に富んだ音をつくる。僕はハウリン・ウルフなんかの演奏が好きだ。」

Kaiser (何故即興演奏をやるようになる、たか?) 「8年前19才の時、ベイリーのレコードを聴いて、これからギターを始めた。多くの音楽家が、いかに演奏するかという事に関心しているが、僕はテクニクを追求することに賭けていると思う。それはエヴァン・パーカー等にも言えることだが、僕もテクニクを追求することを考え続けている。(註: 彼がどういう意味でテクニクという言葉を使、たのかよくわからなかった、いわゆる「技巧」ということではなかつた)

近藤 「プロ・ミュージシャンとして、指れをこまかしたりする技巧は見せたくない。」

近藤 「楽器の規範から身をはずしていきな。」

近藤 (演奏中にトイレに行きたくな、どうするか?) 「(即座に) えりゃ行きますよ。」

- * このコンサートの模様は、第五列が90分テープに記録しています。ダビングご希望の方は、「全野」までお申し込み下さい。(このページの欄外参照)
- * 仙台以外の場所における彼らのライブ・テープをお持ちの方は右よりの第五列までご一報頂ければウレシ。(五列ヨロコブ)

独断と偏見 ①

演奏者と聴衆との間には深く暗い川がある…のならば、その川に橋を架ければ良いのであつて、手取り早い方法としては聴衆であることをやめて演奏者になれば宜しい。

即興演奏のいいところは、今日初めて楽器を手にし友人と、十年も楽器を手にし続けてきた友人とが一括に演奏できるということである。…ここで問題にされるべきことは、楽器の伝統的な演奏技術の有無や優劣ではなく、極言すれば個々人の《即興への向かい方》に尽きると言、てよいのである。

さて、Kaiser-近藤 Duo のレポートを書き終えた直後、奇しくも《イスクラ》というマジメな団体が出している月刊パンフレット《パフォーミング・No.17》の、ご覧のような記述を目にした(次p参照)。

「怒りに頭に達した。詞子で書かれた文章である。なんというか…困るんだよね、こういう古いヒト、てのは。」

ng of some sound-signs: but there is no given grammar. 著作権を無視して
● 視点 (《パフォーミング》No.17》より転載)
先日、アメリカ人ギタリスト、ヘンリー・カイザー
と日本人トランペッター、近藤等則のデュオ・コンサ
ートを聞いた。二人とも比較的有名なプレーヤーで、
いつも以上にどのような演奏になるか期待していた。
しかし、その演奏は全くひどいもので、全く失望し
幻滅し、怒りに近い気持ちさえ味わされた。自分に合
わなかったからではない。なのにどう考えてもふざけ
ている演奏者の態度にである。聴衆はというと、その
ひどい演奏に対して何も言わずに、演奏が終わると儀
礼的に拍手をくれていた。(楽しいと感じた人も当然
いたとは思わうが)。
一体これでフリーのコンサートと言えるだろうか?
その前にこれは、はたして音楽と言えるのだろうか!!
前衛と呼ばれる音楽が、音楽であるためには、一つ
一つの音は絶対に必然性を持っていなければならない。
(前p51つづく)

まず、この人は、自分なりの頑強な音楽観を持、ている。「一つ一
つの音は絶対に必然性を持、ていなければならない」とか、「雑音
だとか、「前衛」だとか。これが間違、い。

「必然性」とか「雑音」とか「前衛」とかいうのは主観的な観念な
し思い入れに過ぎないのである、Kaiser や近藤は別にそんなことを
考えて演奏している訳ではない筈だ。聴き手の方で勝手に彼らの
演奏を「必然性のない音」、「雑音」、「生半可な前衛」という枠の中に
押し込めただけである。「どう考えてもふざけている」ように見え
たのも、「楽器ができないということと卑屈になり受身にな、てし
ました」ムジメな聴衆 = 筆者自身の独断なのである。要するに、
彼らの演奏が、筆者の考える「優れた音楽像」と余りにもかけは
なれていたので臆が立、た、というだけのハナシ。その「音楽像」が
致命的に古いのである。それは、彼が音楽を「一」というより演奏
行為を「自己の目的の表現」と見ている点ひとつ取、てみても
わかる。演奏とは演奏である、それ以上の存在でも以下の存在で
もない。ましてや何らかの目的達成の手段などではないのだ。一
つなくとも自由即興演奏に関してはそう言える。敢えて演奏の目的
を言おうとするなら、《その演奏自体をま、どうすること》であ
るとでも言うほかない。

も、とも、このK・Y氏のような見方が一般の《フリー・ジャズ》ファンの
見方なのかもしれない。《パフォーミング》の別の号でこのK・Y氏
即興演奏家ではアルビート・アイラーが最高だ云々と書いておられ
た。所詮そんなところなのだろう、ファンの認識というものは、
…確かにアイラーは素晴らしいかもしれない。だがと、くはくた
ば、た人間だ。古いレコードに収められた、死んだ人間の、限ら
れた演奏を誉めたたえることよりも、現在進行中の、生きた人間
の、新しい即興演奏への向かい方に目を向けることの方がよほど
重要なことだと思ふのだが。K・Y氏のように己の認識の古さに無
自覚な聴衆は音楽をやめてもらいたいものだ。

それがなくなった時、その音楽は雑音になる。
この日の演奏は明らかに雑音であった。問題は演奏
者だけではなく、雑音を肯定してしまったばかり聴
衆にもある。楽器ができないということで卑屈になり
受身になってしまった聴衆。自分がミュージシャンで
あることに溺れおごり高ぶった演奏者。ここには本来
音楽が持つべき演奏者と聴衆のコミュニケーションは
全くなく、まさに退廃しきっていた。
● 今、きっぱり言うが、このような無自覚な演奏者は
音楽をやめてもらいたいものだ。自己の目的を明らか
にし、それをいかに表現するかということであって、
決して空回りした観念ではない。生半可な前衛は、体
制よりも始末が悪いことを演奏者も聴衆もはっきりと
知るべきだ。(K・Y)

The 5th Columnists think that music is just a generic term of actions or events of uttering sound Impr